Osaka University Knowledge Archive

Title	芥川龍之介「尼堤」の典拠と主題に関する再考
Author(s)	高, 子瑜
Citation	間谷論集. 2023, 17, p. 138-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91367
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈研究論文〉

芥川龍之介「尼提」の典拠と主題に関する再考

高　子　瑜

〈キーワード〉芥川龍之介　尼提　歴史小説　仏伝説話　典拠研究

一．はじめに

一―一．「尼提」について

芥川龍之介「尼提」は大正一四年（一九二五）九月号の『文藝春秋』に発表され、後に第八短編集、つまり生前最後の短編集の『湖南の扇』（文藝春秋社、昭二・六）に収録された。天竺の舎衛城を舞台に除糞人の得道を物語るこの仏伝説話（釈迦の伝記・伝説にまつわる説話）は、『湖南の扇』集中唯一の歴史小説として目立つ。また、『今昔物語集』に関連のある芥川の一連の小説の中で最後を飾るのもこの「尼提」である。作品の分量は四〇〇字詰めの原稿用紙に換算すれば六枚程度で、軽い小品のような感が否めないためであるか、芥川文学の中でほぼ忘れられているようなマイナー作品である。

作品の梗概は次のようにまとめられる。天竺の舎衛城で、除糞人の尼提がある日の午後、路地で釈迦に出会う。糞器を背負った自分の姿を恥じ、何度も他の道へと逃げるが、釈迦がその度に向こうから歩いてくる。七回の逃走を繰り返して進退に窮まった尼提は、釈迦から出家を勧められる。約半月後、給孤独長者が祇園精舎にやってきて、尼提に釈迦の弟子になったことへの祝賀の言葉を述べるが、尼提が弟子となったのは釈迦のほうが悪かったのだと返事する。しかし、その後、一心に聴法を続けた尼提はついに初果を得たという。

一―二．「尼提」の典拠に関する先行研究

「尼提」の典拠に関して、つとに吉田精一氏[1]は原話が仏典に見え、『今昔物語集』にも類話があると指摘した。その類話とは、『今昔物語集』巻第三（天竺の部）の「長者家浄屎尿女得道語第二十一」という仏教説話を指す。日本古典文学大系本『今昔物語集』一（岩波書店、昭三四・三）の頭注には当該説話の出典、同一説話、類話が詳細に記されている[2]。上岡勇司氏[3]はその頭注に基づいて「尼提」と『今昔物語集』の異同を考察し、二者間の相違点を中心に各仏典との比較検討を行なった。

上岡氏の検討結果を要約すると、「尼提」の内容は『今昔物語集』とかなり異なっており、ただ最後に長者を登場させる一点は、各仏典ではその登場人物は「波斯匿王」となっているので、『今昔物語集』に拠っていると考えられる。また、各仏典を見ると、『賢愚経』『大荘厳論経』の両経典の記述に最も近似し、「尼提」の材源として従来から指摘されてきた『今昔物語集』『賢愚経』に『大荘厳論経』を加える必要がある。さらに、氏の検証から見えるのは、最も類似する箇所が一方に偏らず、両経典に散在しており、両経典とも見ないと「尼提」を書けないということである。氏の論文における「作品『尼提』と仏典記事の比較対照表」を参照すると、上述の結論が容易に納得できる。

では、芥川はいかなるルートによって上掲の両経典の記述を参看したのだろうか。「尼提」に先立って芥川はすでに『今昔物語集』などに材を仰いで一連の王朝物を書き上げた。長者を登場させる箇所が『今昔物語集』のみに似る

という上岡氏の検討結果から見ても、「尼提」の執筆時に芥川が『今昔物語集』を参照したのは確実である。一歩踏み込んで、彼が読んだ刊本を絞ってみると、芳賀矢一纂訂『攷証今昔物語集　天竺・震旦部』（冨山房、大二・六、以下、攷証本今昔と略す）である可能性がかなり高い[4]。

攷証本今昔を確認したところ、巻第三の「長者家浄屎尿女得道語第二十一」本文に続いて考証部として掲載されているのは、『法苑珠林』巻九十四穢濁篇便利部の原文である。原文の初句は「賢愚経云」から始まることを見ると、その記述は『賢愚経』経文から引載しているものであることがわかる。そして、考証部の末尾で「（経律異相巻十七旃陀羅児被仏慈化悟道篇参閲）」という類話の仏典巻名が付記されている。ようするに、『法苑珠林』（『賢愚経』）の尼提記述を攷証本今昔に見出せるが、『大荘厳論経』の記述、或いはその巻名情報などは全く言及が見えない。

だとすると、芥川はどのような経路を介して『大荘厳論経』の記述を参照したのだろうか。松本寧至氏[5]は、芥川が仏典『賢愚経』を調査して、ついでに『大荘厳論経』に触れたのではないかと推論している。根拠として、大正新脩大蔵経の第四巻（本縁部、大正一切経刊行会、大一三・七）に『大荘厳論経』と『賢愚経』が共に収録されていたことが挙げられた。大正蔵を通して『賢愚経』を調べた際に、『大荘厳論経』の記述にも目を通した可能性は否定できないが、一七字二九行三段組、全二八部（一二九巻）の漢訳仏典を一冊に収めて約九〇〇頁に及ぶ第四巻は相当な大冊である。偶然に両経典所収の尼提話に同時に触れた可能性は低いと思われる。やはり、芥川は何か別の典拠を見たのではないかと考えるべきであろう。

一―三．本稿の研究内容

後に述べることであるが、仏教学者の常盤大定（一八七〇―一九四五）の著書には、『賢愚経』『大荘厳論経』の両経典の尼提話をわかりやすい形で組み込んだ内容が収められた書物が幾つか見られ（注7を参照）、その中で、『仏伝集成』（丙午出版社、大一三・一）を芥川「尼提」と比較すると、芥川がこれを参考にしたのはほぼ確実と言える。他

の先行研究ではこれまでこの書物の検証は行われていなかったので、本稿は『仏伝集成』の中の「尼提」（以下、常盤「尼提」と略す）を参照して、芥川「尼提」の典拠と主題を再考する。まず、両者間の相似性を考察することによって、常盤「尼提」が芥川「尼提」の直接的典拠であることを検証する。芥川が『仏伝集成』を知った可能性のある二つの経路も簡単に挙げる。続いて、両者を比較対照することで芥川の創造性が見える大きな加筆・変更・削除箇所を浮き彫りにさせる。最後に芥川「尼提」にしかない独創部分、つまり小説の結末（終局部）で芥川によって付加された尼提と給孤独長者の遭遇話に注目して、各々の心理を分析し、作品の主題へのアプローチを試みる。

二．芥川「尼提」と常盤「尼提」の相似性

二―一．常盤大定と『仏伝集成』について

常盤大定は真宗大谷派の僧、文学博士、仏教学研究者である。宮城県伊具郡の出身で、明治一九年（一八八六）に上京して大谷教校、一高での修学を経て、二八年（一八九五）に東京帝国大学に入学、三二年（一八九九）に帝大の文科大学哲学科を卒業後、四〇年（一九〇七）から真宗大学や帝大等の講師、教授などを歴任、東方文化学院東京研究所の評議員、浅草本願寺の輪番なども務めた。昭和二〇年（一九四五）五月に仙台の自坊で逝去するまで長年にわたって仏教学の研究に研鑽を積んだ。常盤の学問的業績はインド文明、日本仏教、及び仏典（仏伝）の解説・翻訳など広汎な領域に及んでいるが、特に中国仏教史に関する研究活動が最も注目を浴びた。大正九年（一九二〇）九月から昭和四年（一九二九）一月にかけて、前後五回にわたって中国で仏教史跡を踏査し、『古賢の跡へ：支那仏蹟蹈査』（金尾文淵堂、大一〇・九）など多大な業績が残された[6]。

『仏伝集成』は、常盤の中期の著作で、書名の通り、仏教開祖・釈迦の生涯を紹介する伝記の編輯書である。本書の序文に記されているように、常盤は合計五二部の経典から釈迦の生涯に関する記述を集めて一冊にまとめ上げ、

「親しみある仏陀の面影を仏典のまま」に伝えている。本文は「本行篇」「太子篇」「求道篇」「説法篇」「涅槃篇」という配列で並んでおり、該当する「尼提」は「説法篇」の第四節「随器開導」の「二」に当たる。現在、本書は国立国会図書館デジタルコレクション（永続的識別子：info:ndljp/pid/971090）でも閲覧可能であるため、以下、必要と思われる字句、表現だけを引用する。なお、引用にあたっては、改行はそのままにして、適宜漢字を現行のものに改める。

二―二．全体としての相似性

まず注目すべきは、常盤「尼提」の文末に掲載されている「（賢愚経六、大荘厳論経）」という仏典名の注記である。これを以て常盤は「尼提」執筆の際にこの両経典の記述を参考にしたことがわかる。この仏典の依拠は芥川「尼提」と仏典記事の対照についての上岡氏の検討結果、つまり各仏典の中で『賢愚経』『大荘厳論経』の両経典の記述に最も近似することと一致している。したがって、芥川「尼提」と常盤「尼提」を対比してみると、例えば、冒頭部での舎衛城の人口、便所、尼提の身分についての説明、尼提が何回も釈迦から逃げたという重複的な逃走過程、出家唱導の時の釈迦と尼提の容姿と言動、作品末尾の尼提が得道の象徴としての「初果」を得たことで幕切れとなる点など、両者の類似箇所は大量に見出せる。

ただし、ここで断っておきたいのは、常盤「尼提」はほぼ『賢愚経』『大荘厳論経』の両経典の漢文記述を日本語に訳しただけで、常盤による解釈や改変はほとんど付け加えられていないことである。強いて探せば、尼提話における偈言（仏典中の詩文）の翻訳には少し常盤のオリジナリティが見られそうであるが、後述するように芥川は自作に偈言内容を取り入れていない。ようするに、基本的に常盤「尼提」にしかない筋書きや表現を芥川が「尼提」に取り込んだということはない。そのため、『仏伝集成』を見ずに、『賢愚経』と『大荘厳論経』の両経典だけを見ても「尼提」を書けるのではないかという疑問を持たれるかもしれない。にもかかわらず、芥川「尼提」の典拠を仏典ではな

く、『仏伝集成』と特定することができる。なぜかと言うと、簡単に述べれば、独特な設定と表記で『仏伝集成』と一致するからである。以下に芥川「尼提」の偈言を説く設定や各部分の表記を取り上げて検討する。

二―三．偈の設定

まず両者における偈言を説く設定の一致が指摘できる。仏典のほうを先に見ると、偈言を収載している経典『大荘厳論経』では、尼提話の冒頭から結末まで偈言を説くことが随所に記されており、しかも、釈迦が述べる偈言のみではなく、尼提が述べる偈言も多量に見られる。例を挙げてみると、

冒頭部（大正新脩大蔵経第四巻に拠り、適宜漢字を現行のものに改める、以下同、二九四頁中段から下段まで）に次のようにある。

爾時尼提既見佛已。自鄙臭穢。背負糞瓿。云何見佛。（中略）我今見臭穢故不得往。以是之故懊惱燋心。即説偈言（日本語訳（『仏伝集成』を参照、以下同）：爾の時、尼提既に仏を見已りて、自臭穢にして背に糞器を負へるを鄙み、いかで仏を見る。（中略）今、この下賤の業で我往くを得ざる。懊惱心を焦くは、唯これのみ。即ち偈を説きたまはく。（偈言の発話者は尼提、偈言内容の引用は省略、以下同、以下、全ての傍線は引用者））。

後半部（二九五頁中段）に次のようにある。

世尊挙手向彼尼提。（中略）欲使尼提生勇悍心。即与尼提而説偈言（日本語訳：世尊手を挙げて彼尼提を招きたまふ。（中略）尼提をして勇悍の心を生ぜしめんとて、即ち尼提に偈を説きたまはく。（偈言の発話者は世尊））。

常盤「尼提」に至ると、常盤は『大荘厳論経』のように頻繁に偈言を挿入せず、ただ一箇所に偈言を持ち出している。即ち、尼提の出家の断りに対して、仏が仏法は貴賤を分たないと説いた直後である。しかも、それは釈迦が述べる偈言である。以下のようである。

尼提「如来は尊重にして金輪王の種なり。翼従の弟子もまたこれ貴人なり。我は下賤弊悪の至極なるものなり。

いかで彼等に同じく、出家するを得べき」。

佛、我が法は清妙にして、猶浄水の能く一切の垢穢を洗除するが如く、また大火の大小好悪を皆焼くが如し。

「我が法は弘広にして辺なし。富も貧も、貴も賤も、男も女も、能く之を修するものは、皆諸欲を尽す」。

佛、すなはち偈を説きたまはく（偈言内容の引用は省略、三四九頁）。

芥川「尼提」を見ると、偈言が言及されている箇所はただ一箇所しか見えない。ただし、具体的な偈言内容を芥川は省略した（省略の意味は後述）。そして、偈言を説くタイミングや発話者、発言内容は常盤「尼提」と全く同じである。以下のようである。

「わたくしは賤しいものでございまする。到底あなた様のお弟子たちなどと御一しょにをることは出来ませぬ。」

「いやいや、仏法の貴賤を分たぬのはたとへば猛火の大小好悪を焼き尽してしまふのと変りはない。……」

それから、――それから如来の偈を説いたことは経文に書いてある通りである（岩波版全集第一二巻（平八・一〇）、二九七頁、引用に当たっては、適宜漢字を現行のものに改め、ルビは省略した、以下同）。

上記の偈言を説く箇所の一致から考えると、芥川「尼提」における偈言の設定は『大荘厳論経』ではなく、常盤「尼提」に拠ったと考えられよう。

二―四．各部分の表記

次に、各部分の表記をめぐって両者の相似性を見てみる。

①釈迦が尼提をいざなう場所

上岡氏の論文では、「『今昔物語』は如来が女を「耆闍崛山」に誘うことになっているけれども、他の仏典『賢愚経』・『大荘厳論経』・『経律異相』は「祇洹」（『大荘厳論経』は明瞭にそうは言っていないが、この語は出て来ている）、『法苑珠林』は「祇桓」、『出曜経』は「祇洹精舎」となっている」とある。

芥川「尼提」と常盤「尼提」を見ると、「祇園（祇園精舎）」という表記で一致している。

②釈迦の手の描写

釈迦の手の描写を比較すると、以下のようになっている。

『大荘厳論経』「其指纖長爪如赤銅。指間網縵以覆其上。掌如蓮花」（二九五頁中段）。

常盤「尼提」「その指纖長にして、爪は赤銅のごとく、掌は蓮華に似たる」（三四九頁）。

芥川「尼提」「その指纖長にして、爪は赤銅のごとく、掌は蓮華に似たり」（二九六頁）。

芥川「尼提」と常盤「尼提」を対比すると、仏典の「指間網縵以覆其上」という表現が省かれている他に、「蓮華」についての表記表現の一致も指摘できる。

③尼提が背負っていた容器

芥川「尼提」には、「瓦器」と「糞器」の二つの表記が以下の五箇所でなされている。

尼提はいつものやうに諸家の糞尿を大きい瓦器の中に集め、そのまた瓦器を背に負つたまま（二九四頁）

尼提はかう言ふ如来の前に糞器を背負つた彼自身を羞ぢ（二九五頁）

尼提は糞器の重いのを厭はず（二九六頁）

が、尼提は愈驚き、とうとう瓦器をとり落した（二九六頁）。

常盤「尼提」にも「瓦器」と「糞器」という二つの表記が見える。以下のようである。

爾の時、世尊、阿難を将て城内に入り、尼提が一瓦器を負ひ、不浄を盛り満て、往いて之を棄てんとするを見て、之を抜済せんと念じたまふ（三四七頁）。

既に佛を見已りて、自臭穢にして背に糞器を負へるを鄙み（三四七頁）、

仏典の同じ箇所を見ると、

爾時世尊。即知其応度。独将阿難。入於城内。欲拔済之。到一里頭。正値尼提。持一瓦器。盛満不浄。欲往棄之

（三九七頁中段）。

爾時尼提既見佛已。自鄙臭穢。背負糞瓦（二九四頁中段）。

「瓦器」という表記は同様であるが、「糞瓦」という表記は常盤によって「糞器」に改変されている。仏典の尼提話の他の箇所の表記を調べてみると、「以瓶打壁（三九七頁中段）」、「先雖臭穢尚有餅遮。今餅破壊（二九五頁上段）」という「瓶」「餅」の表記が見えるが、「糞器」という表記は見つからない。これは恐らく常盤独自の改変であろう。

以上のように、偈言の設定と各部分の表記が類似することから、常盤「尼提」が芥川「尼提」の直接的典拠だと結論付けたい[7]。

二―五．芥川が『仏伝集成』を知った可能性のある経路

最後に芥川が『仏伝集成』を知った可能性のある経路を挙げてみる。現時点では芥川と常盤の関わりは確認できず、『仏伝集成』の名は芥川の旧蔵書目録にもないが、次のような可能性のある二経路が考えられる。

一つは攷証本今昔の「凡例」に記されていた謝辞である。「凡例」の最後の項で天竺部の出典については、顧問者として常盤大定の名が付記されている。攷証本今昔を手元に置いていたはずの芥川がこの謝辞から常盤に興味を持ち、「尼提」創作時点で常盤の最新の著書『仏伝集成』をどこかで見た可能性があろう[8]。もう一つ推測されるのは当時芥川に弟子入りしていた堀辰雄との交際である。「堀辰雄蔵書目録」（『堀辰雄全集』別巻二（筑摩書房・昭五五・一〇））に『仏伝集成』の名が見える（堀辰雄の蔵書は現在堀辰雄文学記念館に所蔵）[9]。

三．「尼提」における芥川の手による尼提話のアレンジ

三―一．「尼提」の主題に関わる先行研究

次に、内容描写の点から芥川「尼提」のアレンジについて詳しく考察していきたい。まず、「尼提」の主題に関わる先行研究を簡潔にまとめる。発表当時に「尼提」についての目ぼしい同時代評はほぼ見出せず、間宮茂輔[10]の論評がやや詳しいが、優れた文学技巧を評価しながらも、創作態度の遊戯性を批判するという芥川文学への常套的評論である。吉田精一氏によって典拠が指摘されて以来、この小説は焼き直しのものに過ぎず、特に新味が見えないと見做されてきた。例えば、渡部芳紀氏[11]は「芥川の従来得意としたひねりや皮肉の無いすっきりした短篇」「手慣れた作品ですっきりしたおもしろさはあるが重みはない」と評している。

近年になると「尼提」を再検討する動向が現れてくる。本格的作品論として「尼提」を芥川の女性関係の問題と結びつけて論じている松本氏の力作（注5を参照）がある。「尼提」に秘められたのは、執筆当時に関係が深かった片山広子との葛藤だと述べられている。また、近年上梓された芥川の諸辞典の項目「尼提」にも前向きな見解が多く出され、例えば、「聖なる愚人」系譜における位置付け（『芥川龍之介事典〔増訂版〕』（明治書院、平一三・七）、三八五頁、浅野洋氏執筆）、芥川の童話文学との関連（『芥川龍之介大事典』（勉誠出版、平一四・七）、六一九―六二〇頁、田村嘉勝氏執筆）など多角的な研究視角が示唆されている。

上記の論は凡そ作品の外側に立って主題へのアプローチを試みているが、典拠がある以上、典拠との比較でまず内部から主題を探求しなければならない。小説そのものの内容に向き合ったものには仏典記述と精緻に対照している上岡氏の論文があるが、論文の末に「最後に小稿の主旨は「材源再吟味」にあるため、やむを得ず作品の主題や芥川の仏典解釈などについて省略したが、いずれ機会を改めて稿を成したいと思っている」とあり、本文でも上岡氏の以降の論著でも「尼提」の主題についての立論が見当たらない。そのため、以下で直接常盤「尼提」と比較しながら、芥川の創作部分を明らかにし、作品主題の解明を図ってみよう。上岡氏の論文は芥川「尼提」と『賢愚経』『大荘厳論経』との相違点[12]への言及も少なくないので、本稿では、上岡氏の論文におけるような細密な比較対照を避けて、大きな加筆・変更・削除箇所、及び芥川「尼提」にしかない独創部分を中心に、上岡氏の論文では触れられていない点

について考察を行っていく。

三―二．大幅な加筆箇所

まず大幅な加筆箇所を見ると、釈迦と尼提の遭遇の場面が目立っている。芥川「尼提」ではその場面がクローズアップされており、遭遇時に釈迦と尼提各々の内面世界が現出されている。これは次に展開する尼提の逃走のために説明を行なっていると考えられる。常盤「尼提」では早々に逃走の場面に入ってしまうので、それと比べて唐突感を避けることができるのである。この場面には常盤「尼提」に見えない多岐にわたる表現が付け加えられている。まず、これら加筆された表現を検討していく。

例えば、釈迦の非凡さを表すために、遭遇の際に尼提眼中の「眉間の白毫や青紺色の目」という釈迦の特異な容貌が強調されている。この形容の記述は『仏伝集成』全体を見ても見つからないが、広く知られている釈迦の身に具わる三十二相中の二相として、『観無量寿経』などの仏典、『往生要集』などの仏書に記載がある[13]。また、「釈迦如来は勿論三界六道の教主、十方最勝、光明無礙、億々衆生平等引導の能化である」という表現は釈迦の無上の地位を強く印象付けている。類似した表現が芥川の小説「俊寛」（『中央公論』、大一一・一）にも見られ、奥野久美子氏がこの表現の出処を検討しているが、『釈迦八相物語』（八巻、寛文六年）第六の三「びるしやな仏、四句を授給ふ事」にはほぼ同一表現[14]が見え、芥川は直接これに依拠したのであろう。

なお、釈迦の偉大さを強調するように、「この舎衛国の波斯匿王さへ如来の前には臣下のやうに礼拝すると言ふ」「名高い給孤独長者も祇園精舎を造る為に祇陀童子の園苑を買つた時に、黄金を地に布いたと言ふ」という二つの事項が言及されている。これらは何れも『仏伝集成』に拠ったものだと考えられる。『仏伝集成』の第四章第一節の一五「祇園精舎」には、給孤独長者が祇陀童子から園苑を買い求めて、仏のために祇園精舎を建立する詳細がある。その中には、「長者、即日、速に車乗象馬の類を以て黄金を運搬して、処々に布き迄り」との記述が見える[15]。また、

直後の一六「勝軍大王」という節の文末には、仏の説法を聞いて、「舎衛国主勝軍大王（波斯匿）」は、「深心信受し、言の過ぎたるを悔い、頭面を以て佛の双足を礼し、懺謝旋繞し、歓喜して退きぬ」とある。芥川が尼提話を執筆する際に、『仏伝集成』におけるこの二つの事項にも目を通したことがわかる。

さらに、釈迦の大慈悲心を体現する箇所、「無智愚昧の衆生に対する、海よりも深い憐憫の情はその青紺色の目の中にも一滴の涙さへ浮べさせたのである」という表現に注目する必要がある。芥川「尼提」全体を見渡すと、釈迦の身に超越者の印象のみではなく、温もりのある人間としての側面も感知できる。ここでは「蜘蛛の糸」（『赤い鳥』、大七・七）の中で「ぶらぶらと」歩いたり、「悲しそうな顔」を見せたりする御釈迦様を想起されよう。これらの造形は、釈迦を感情が見える人間のように拵えるという芥川の創作態度を窺わせる[16]。

以上、様々な表現によって釈迦の形象がかなり充実したものになっている。ここから芥川が釈迦像の造形に力を注いだことが確認できるのである。

三―三．変更箇所

常盤「尼提」の記述を忠実に辿りながらも、いくぶん変更を施した箇所としては、釈迦と遭遇後の七回にわたる尼提の逃走過程が挙げられる。その逃走過程には、芥川の文学的手腕の一端を窺えるように思われるので、芥川がいかに尼提の逃走過程を変更したかを見ていこう。

常盤「尼提」では、尼提の逃走過程に関して、尼提が道を曲がった回数が分明ではない。あえて数えてみると、「道を異にして去り」「異巷より避け、隠れて去らんとす」「余道に廻り赴きて避けんとすれば」「却行し廻避せんとして」との記述から四回と考えられよう。芥川のほうは七回まで拡大されており、かつ、毎回の逃走が文中で明瞭に区分されている。さらに、尼提が道を曲がる度に、釈迦が向うから安庠と（悠々と）（獅子王のように）歩いてくるという釈迦の姿についての反復句[17]が添えられている。このような逃走回数の拡大、及び反復句の応用などによって、

まず尼提の逃走過程は重複性やリズム感を鮮明に現している。また、その過程においては、尼提の狼狽した様子と裏腹に、釈迦の超然たる姿もありありと目に浮かんでくる。このような効果が現れてくるのは、芥川の文学的技巧に負うところが大きいと言えよう。

以上で、芥川は常盤「尼提」における尼提の逃走過程を明晰化するために、変更を加えたことがわかる。

三―四．削除箇所

無論、芥川が尼提話を構成するプロセスの中で、加筆・変更を加えた箇所だけではなく、大きく削除が施された箇所も見られる。それは主に仏教の教訓臭のあるところに集中しているように見える。例えば、常盤「尼提」における尼提が逃走するときの心理については、尼提は表に「自臭穢にして背に糞器を負へるを鄙み、極めて慙愧を懐」いていると同時に、「我、前世に於て福業を造らず、悪に牽かれて、今世に此苦を受く。今、この下賤の業を愁ひざるを、衆人皆仏前に到るを得て、我独往くを得ざるを悲む」と描写されており、つまり、尼提の逃走心理には仏教の因果輪廻観の一面も強調されている。これは仏法を説く仏伝説話においてはごく自然な設定に属するが、近代的小説の芥川「尼提」では、仏教の教訓的意味が色濃く顕現するのは不適当となるため、芥川は自作でこの心理を「自身を恥ぢ、万が一にも無礼のないやうに」とごく平易に変え、その心理にあった仏教の教訓臭い一面を取り除いたわけである。

また、前述したように常盤「尼提」には釈迦が尼提に向けて説いている長文の偈言がある。この部分は常盤「尼提」の内容のほぼ半分を占め、同様の文型が繰り返されており、長たらしい感があるが、これは釈迦の教えを直接的に聞くものとして、仏伝説話にとっては重要な内容である。しかし、常に作品において洗練さを求めている芥川にとっては不要なものと言えよう。そのため、芥川「尼提」では、この部分を「如来の偈を説いたことは経文に書いてある通りである」と一文で締め括り、本筋と関連が薄い長文の偈言をさっぱりと削除することで、常盤「尼提」における冗長さを避けることができたのである[18]。

三―五．小説の結末（終局部）

偈言内容の部分を削除したかわりに、芥川は攷証本今昔に目を転じ、そこにある長者の話を踏まえて、給孤独長者と尼提の遭遇という独自の筋書きを自作に織り込んでいる。この二人の遭遇は芥川「尼提」にしかない独創部分に属し、当然「尼提」の主題を考えるうえで恰好の視点を提供している。以下で芥川が如何に攷証本今昔を踏まえてこの独創部分を作り出したかを詳しく分析し、芥川の尼提話への独特の視点も検討してみる。

尼提話の結末というと、常盤「尼提」では「尼提仏の所説を聞き、信心生じて出家を求む。仏、阿難をして城外の大河水に洗浴せしめ、これを将て祇園に至り、為に経法を説きたまふに、霍然として意解け、初果を証しぬ」とあり、尼提話の流れに鑑みると、かなり自然で簡略な結末であろう。しかし、芥川はこの結び方に従わず、前述したように攷証本今昔に目を向けて長者の話を踏襲し、独自性を練っている。長者を登場させた点のみは一致しているが、内容そのものは全く異なっている。

攷証本今昔では、長者は自家の汚い貧女（尼提）が釈迦の弟子となったことに驚いて釈迦のところに抗議に来るが、逆に釈迦から自分の貪欲・邪見をあばかれて後悔する話になっている。長者の名は明記されておらず、話の中では長者と得道した貧女（尼提）との直接的交渉は見られない。芥川は攷証本今昔を踏襲して「長者」を登場させたが、その人物を「給孤独長者」と改変し、仏のところに抗議に来る一段も削除し、給孤独長者に尼提と直接話を交わさせている。その部分を引用する（岩波版全集第一二巻（平八・一〇）、二九七頁）。

「尼提よ。お前は仕合せものだ。一たび如来のお弟子となれば、永久に生死を躍り越えて常寂光土に遊ぶことが出来るぞ。」

尼提はかう言ふ長者の言葉に愈慇懃に返事をした。

「長者よ。それはわたくしが悪かつた訣ではございませぬ。唯どの路へ曲つても、必ずその路へお出になつた如

来がお悪かつたのでございまする。」

しかし尼提は経文によれば、一心に聴法をつづけた後、遂に初果を得たと言ふことである。

三―六．尼提と給孤独長者の心理

作品最後でのこの一段をどう読み解くべきであろうか。まず芥川の人物設定の意図を探ってみよう。登場人物を「給孤独長者」と改変していることには、給孤独長者が祇園精舎を造ったという前掲の話[19]、及び釈迦が尼提を「祇園精舎」に連れてきたことと呼応させる企みがあると考えられよう。この設定によって祇園精舎の建立者である給孤独長者と祇園精舎の新入者である尼提の間で対話が起こるのも不自然さがなく、合理的な展開に変えられている。また、貴い給孤独長者とかつて下賤の除糞人であった尼提の対話内容が注目されることとなっている。

給孤独長者の言葉は一見すれば、喜びを表す祝賀の言葉のように見えるが、実はそうではない。釈迦の弟子となったことで常寂光土（仏教では至極の浄土を指す）に遊ぶことが出来るとあるように、尼提に対する嫉妬か揶揄の意味合いを読み取れるからである。この解釈は憶測の感を持たれるかもしれないが、このように解読できる根拠が次の尼提の返事に含まれている。尼提は返事で、釈迦の弟子となったのは自分の要望ではなく、如来の強引さによることを訴えている。つまり、尼提は給孤独長者の言葉に含まれた、悪意めいたことを正しく聴取できたのである。その対応策として、釈迦の弟子となった責任を他人の釈迦に帰することで、給孤独長者の非難の矛先を巧妙に避けようとしたわけである。

前述したように、元々給孤独長者は慈悲心が深く、孤独で貧しい者に食を給していたためその名を呼ばれていた（注15参照）。「尼提」に芥川は弱者の同情者というイメージと齟齬がある給孤独長者を登場させており、ここから彼の歴史離れの創作態度が見られる。無論、このような給孤独長者の形象は、攷証本今昔における抗議を行う長者のイメージを受け継いだものとも考えられる。自家の汚い貧女が釈迦の弟子となったため仏に抗議を行う長者であって

も、釈迦の弟子となった尼提に嫉妬か揶揄のニュアンスを含んだ言葉を発する給孤独長者であっても、いずれも長者としての貧者に対する傲慢な心理が露呈していよう[20]。

では、芥川は尼提に同情の念を抱いているかというと、実はそうではない。尼提のその後を説明した作品の最後の一文、「しかし尼提は経文によれば、一心に聴法をつづけた後、遂に初果を得たと言ふことである」に、芥川が尼提に投げた皮肉の視線を読み取れる。というのは、この説明において前の返事と矛盾している行動が伝えられているからである。釈迦の弟子となったことに対して給孤独長者の前ではネガティブな返事をしていた。「しかし、尼提は経文によれば、一心に聴法をつづけた後、遂に初果を得た」という。これによって、前のネガテイブな返事はただその場の対応に過ぎないことがわかる。また、このような言動を取る尼提における偽りの姿が曝露されると思われる。

三―七．主題へのアプローチ

従来、「作者に格別の解釈を加えたふしが見えない[21]」「芥川の従来得意としたひねりや皮肉の無いすっきりした短篇[22]」と評されたように、「尼提」には特に新味がないと見做されてきた。また、「謙虚な心の持ち主の幸福[23]」「主人公自体は、観念の勝った知的風貌とは別の、もう一人の芥川が愛した人間像であることは確実[24]」とあるように、尼提の人物像は肯定的に捉えられてきた傾向がある。しかし、作品の終局部でのこの独創部分に分析を加えると、芥川の尼提話への独自の視点を見出すことができ、尼提の返事と行動との間の矛盾に、芥川が尼提に投げた皮肉の視線を読み取れる。

典拠の常盤「尼提」では、得道前後の尼提の心理については触れられておらず、給孤独長者も登場せず、たちまち話が閉じられる。それに対して芥川は、尼提と給孤独長者の対話を創ることによって各々の心理を織り込み、尼提話に新たなる要素を付け加えた。不潔下賤な除糞人が清浄聖潔なる祇園に入ったことに貴い給孤独長者はいかに思うか、自ら卑しく思う尼提は地位が高い給孤独長者の前でいかなる言動を構えるか、こうした点は常盤「尼提」には描

かれていない。芥川は自分の想像力を駆使して、数行の対話内容のみを以てその場面を提示している。

芥川は終局部では、元の釈迦と尼提の話と別に、給孤独長者と尼提の話を作り出した。そして、このような付加された話においては、特に長者と貧者という両極に位置する者の心理に独自の視点を与えたように思われる。換言すれば、尼提話において芥川が真に関心を寄せているのは、釈迦が除糞人を弟子にした事件が提示する釈迦救済の普遍性という仏教教訓ではなく、この特異な事件（釈迦は除糞人の尼提を弟子に入れたこと）後の、周辺の人（給孤独長者）、及び本人（尼提）の心理ではないかと考えられる。この点で言えば、「尼提」には、主人公と周辺の人の心理を抉ることに心血が注がれている芥川の「鼻」「芋粥」[25]など従来の歴史小説に共通しているものがあると言える。勿論、「尼提」においては、給孤独長者の傲慢な心理であれ、あるいは尼提の偽りの姿であれ、それらにはいずれも人間不信の芥川の、人間性に隠蔽されている醜悪さに対する鋭い洞察が見られると考えられよう。

四．おわりに

殆ど本朝の部に材源を仰いでいる、芥川の『今昔物語集』と関係する一一点の小説の中では、興味深いことに、最初の「青年と死と」と最後の「尼提」のみが例外で、天竺の部と関わっている。芥川文学において、「尼提」は今昔物の最後の作としてもっと注目されるべきだったと思われるが、残念なことに、発表当時でも現在でも見逃されてしまっている現状である。

その典拠に関しては、『今昔物語集』及び仏典との関連が考えられてきたが、本稿では、常盤大定『仏伝集成』の「尼提」と比較し、特にそこにある独特な表記などを検討することによって、『仏伝集成』が直接的典拠であることを示した。そして、この小説は『今昔物語集』などの二番煎じで、特に新味が付加されていないと過小評価されてきたが、本稿では、初めて直接的典拠と比較することにより、全体としては典拠の大筋から変えた点は少ないが、様々な

加筆・変更・削除を施して尼提話の展開を合理化した点、仏教教訓的な箇所を削除して教訓臭のある仏教説話を近代的小説に改作した点、終局部で尼提と給孤独長者の遭遇話を付加し各自の内心を描出した点などにおいては、芥川の手腕が十分見えることが明らかになった。最後に、作品の主題について、従来の論では外縁の事情との関わりからその主題を論じる傾向が強かった。本稿では、作品そのものの内容に立ち返り、特に芥川「尼提」にしかない終局部で描かれている尼提と給孤独長者の心理を明らかにすることによって、芥川が人間性に隠蔽されている醜悪さを暴いているのではないかと論じており、「尼提」一編の主題の解明を試みた。

注

1　吉田精一『芥川龍之介（国文学評伝叢書）』（三省堂、一九四二年一二月）

2　出典：『賢愚経』巻第六尼提度縁品第三〇。同一説話：『法苑珠林』巻第九十四穢濁篇第九十四便利部第四。類話：『経律異相』巻第十七（18）、『大荘厳論経』巻第七（48）、『出曜経』（19）、『大智度論』（26）、『有部毘奈耶』（42）。尼提話の上記の諸仏典における相互的関係について、菊地良一氏の詳細な研究がある（「経典の譬喩から説話形成への過程：『出曜経』『賢愚経』の譬喩話から『経律異相』『法苑珠林』『今昔物語集』の説話を中心にして」『東洋文化』第四号（一九七九年三月）一―二七頁）。

3　上岡勇司「芥川龍之介『尼提』の材源再吟味」『北海道教育大学紀要第一部A　人文科学編』第二五（二）号（一九七五年二月）一九―二六頁

4　上岡氏の論文でもこの書物が挙げられている。芥川が『今昔物語集』に作品の題材を求めた時、ほぼその本朝の部のみに関心を寄せていた。天竺の部に関係する芥川の著作は「尼提」のほかに、僅かに戯曲習作「青年と死と」（『新思潮』、大三・九）、晩

年の評論「今昔物語に就いて」（『日本文学講座』、昭二・四）に言及された「三獣行菩薩道兎焼身語」のみである。いずれも攷証本今昔との関連が指摘されている（長野嘗一『古典と近代作家―芥川龍之介―』（有朋堂、一九六七年四月、二四―三三頁）、須田千里「『今昔物語集』の内と外―『羅生門』『偸盗』をめぐって―」『国文学：解釈と鑑賞』第七二（九）号（二〇〇七年九月）三五―四二頁）。また、小説「俊寛」に出ている仏教説話「難陀婆羅の乳糜」が『今昔物語集』巻第一（天竺の部）の五話に見られ、これも攷証本今昔に拠ったことが奥野久美子氏の研究によって検証された（「芥川「俊寛」と『攷証今昔物語集』」『芥川龍之介研究』第九号（二〇一五年七月）一一―二二頁）。

5　松本寧至『越し人慕情　発見芥川龍之介』（勉誠社、一九九五年一月）一四八―一一二頁

6　常盤大定の経歴については、常光浩然『明治の仏教者』下（春秋社、一九六九年二月）三五八―三七〇頁、横超慧日（「常盤大定先生―中国仏教史研究の大成者（人と業績）―」（『佛教学セミナー』第八号（一九六八年一〇月）六二―七四頁）を参照。当時帝大の教員であった氏の中国現地踏査という日本仏教研究界の壮挙を芥川が知ったかどうかは確認できないが、時期から見れば、芥川の中国旅行（大正一〇年（一九二一）三―七月）は正に氏の調査の一回目（大正九年（一九二〇）九月―一〇年一月）と二回目（大正一〇年（一九二一）九月―一一年二月）の間である。

7　宮本正尊編『仏教論叢：常盤博士還暦記念』（弘文堂書房、昭八・七、三―一〇頁）の巻頭に掲載された「著述目録」を参考にしてみると、『仏伝集成』の前に、常盤には『釈迦史伝』（森江書店、明三七・八）、『釈迦牟尼伝』（前川文栄閣、明四一・四）の仏伝書がある。それらには尼提話に関する内容が見当たらない。調べた限りでは、『仏伝集成』の他に、氏の著書で尼提話に言及したものとして、「大荘厳論経を論ず」（『馬鳴菩薩論：教界文豪』金港堂、明三八・七、九―一八頁、これに拠って啞牛が「尼提と仏陀」（『布教叢誌』第一八（一〇）号、明三八・一〇、一―五頁）を執筆）、「四姓平等」（『仏陀之聖訓』博文館、明三九・九、二〇七―二一一頁、大正一三年（一九二四）に増補訂正版がある）などがある。それらを芥川「尼提」と比べると、いずれも『仏伝集成』より類似性が低い。

8　「凡例」と同じく攷証本今昔の巻頭に置かれている「序論」を芥川が見た跡が残されている。芥川が評論「今昔物語に就いて」

の中に述べている表現は「序論」から引用したものと指摘されているからである。宮田尚「芥川龍之介と『今昔物語』の出会い」（佐藤泰正編『芥川龍之介を読む』笠間書院（二〇〇三年五月）一二三―一四一頁）を参照。

9　堀辰雄は晩年の芥川と親しく交流し、特に「尼提」創作の前後で二人の交際は頻繁であった。現に同年七月二〇日付堀辰雄宛の小説創作指導の旨の書簡が残されている（当時堀は帝大国文科に在学）。ほかには、同年の八月下旬にも二人は、片山広子、その娘総子と共に軽井沢に滞在し、碓氷峠に登ったり、追分にドライブしたりしていた。ちなみに、昭和二年（一九二七）の芥川の葬式後のある日、堀は遺族から芥川生前の蔵書の整理を頼まれたこともあるという。後年、堀も同様に『今昔物語集』に目を向けて創作の素材を得て「曠野」（『改造』、昭一六・一二）を書いた。「尼提」執筆の当時、堀との交際交流によって芥川が『仏伝集成』を知った可能性も考えられる。以上の経路について、奥野久美子氏からご質問とご指摘を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

10　間宮茂輔「『文藝春秋』創作鳥瞰図一『尼提』（芥川龍之介氏）」『読売新聞』朝刊、一九二五年九月五日付

11　渡部芳紀「第八短編集「湖南の扇」」『国文学：解釈と教材の研究』第六号（一九七七年五月）一四九頁

12　常盤「尼提」はその両仏典から繋ぎ合わせられたもので、常盤「尼提」との相違点ともいえる。

13　例えば、『観無量寿経』に「眉間白毫、右旋婉轉、如五須彌山」、『往生要集』に「眉間白毫光、猶如清浄月、増益面光色」、『法華経・序品』に「爾時佛放眉間白毫相光 照東方万八千世界」とある。芥川は上掲のような何らかの仏教の書物に接してこの語句を覚えたのだろう。

14　奥野氏の論文は注（4）を参照。『釈迦八相物語』第六の三「びるしやな仏、四句を授給ふ事」に「三界六道の教主、世尊、十方最勝仏、光明無量仏、三学無碍、億々衆生、平等引導の能化、南無釈迦牟尼如来、本師本仏と。となへ給ひて」とある（引用は朝倉治彦編『仮名草子集成』第三五巻（東京堂、二〇〇四年三月、一二六頁）に拠る）。

15　給孤独長者は本名が須達（多）、釈迦と同時代の舎衛城の長者。常に孤独で貧困な者に食を給していたため給孤独長者とも呼ばれていた。仏教聖地の祇園精舎を釈迦に寄進した人物として有名（今野達校注『今昔物語集』一（岩波書店、一九九九年七月）

16 附の「人名・諸尊名索引」を参照)。攷証本今昔では、巻第一「須達長者造祇園精舎語第三十一」に須達長者が祇園精舎を建立することが記載されているが、「須達（長者）」と表記され、「給孤独長者」という呼称が見えない。また、「祇陀（太子）」とあり、芥川「尼提」での「祇陀童子」と相違している。『仏伝集成』では、同節の直前の一四「須達長者」でその名が「給孤独長者」とされており、一五「祇園精舎」で「祇陀童子」と表記されている。芥川が『仏伝集成』のほうを参考にしたと言えよう。

芥川文学における釈迦像の特徴については、「芥川の釈迦は一個の人格者でありながら、その言動は近代人と何らか変わることのない存在である。釈迦を一介の人間と捉えようとする姿勢があり」と指摘している研究者がいる（武田昌憲氏執筆「釈迦」(『芥川龍之介大事典』、勉誠出版、二〇〇二年七月、一五六頁)。このような「人間としての釈迦」という意識は、芥川の仏伝文学などの披見によるものではないかと推測される。『仏伝集成』などでは、釈迦は様々な超自然的な出来事を起こした神話的な存在でありながらも、誕生、成年、結婚、出家、苦行、教化、死歿という人間としての一生を辿っていたことが記されている。また、仏伝文学などの影響が推定される以外、同時代文学、例えば、芥川が観た武者小路実篤の戯曲「わしもしらない」(『中央公論』、大三・一）の刺戟も考えられる。「わしもしらない」における人間としての釈迦像を描こうとする武者小路実篤の創作意識は歴然である。大正四年（一九一五）六月二九日付、井川恭宛ての書簡においては、芥川がこの戯曲「わしもしらない」を高く評価し、帝国劇場の観劇を井川に勧めている。釈迦像の問題について、浅野洋氏からご質問を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

17 反復句（リフレイン）については芥川文学で「尼提」のほか幾つかの用例が見当たる。最も有名なのは「羅生門」(『帝国文学』、大四・一一）の冒頭の「この男の外に誰もいない」という一文であろう。他には「六の宮の姫君」(『表現』、大一一・八)、「尾生の信」(『中央文学』、大九・一）などの作品にも見られる（仁平道明「芥川の二つの「尾生の信」」(『静岡大学教養部研究報告　人文科学篇』第一三号（一九七八年三月）二〇八―二一〇頁）を参照)。

18 しかし、この偈言内容の部分には尼提話の仏教的意味を理解する大事な教訓も含まれている。つまり、貧富、延いては老若男女、階級などの一切を問わず、釈迦はあらゆる者を救うという仏教救済の普遍性が偈言内容に説かれている。芥川は読者にこ

れを開示することに興味を持っていないようである。仏教説話に接する時にこのような姿勢を構えるのは芥川が残した文章からも窺える。「尼提」の二年ほど後に書いた評論「今昔物語に就いて」で本朝部の「仏法」の部については、仏法そのものに興味がなくて、ただ当時の人々の心に興味を感じていると述べられている。この文章はまた、本稿で主題を探る際に尼提と給孤独長者の心理を論じるための証拠の一つでもある。

19 芥川「尼提」では、「名高い給孤独長者も祇園精舎を造る為に祇陀童子の園苑を買つた時に、黄金を地に布いたと言ふ」とある。

20 布野栄一氏（「本庄陸男の〈教育物〉論稿」『日本近代文学』第一一号（一九六九年一〇月）八四頁）は、芥川の歴史小説に触れる際に、「尼提」について以下のように述べている。「釈迦の仏弟子となった尼提を、給孤独長者はこれを羨望するのである。釈迦のために祇園精舎を寄進し、貧しいものに食を与える善根を積みながら、嬌慢のために長者は仏の救いを得られないのである。芥川が興味を覚えたのは、長者をさしおいて、〈屎尿女〉を選んだ釈迦の仏道の前に平等を求めた叡知であったのであろう」とある。布野氏の給孤独長者に関する発言に賛同することができるが、芥川が興味を覚えたことについて、布野氏の意見と異見を持つ。

21 注（1）を参照。

22 注（11）を参照。

23 吉田精一「芥川龍之介の作品について」『アグニの神：竜之介童話代表作集』（小峰書店、一九四九年四月）

24 前述した浅野洋氏執筆の項目の「尼提」（『芥川龍之介事典〔増訂版〕』）を参照。

25 清水康次『芥川文学の方法と世界』（和泉書院、一九九四年五月）六〇―八二頁

付記・謝辞

本稿は日本近代文学会関西支部二〇二一年春季大会（六月五日）における口頭発表、及び大阪大学へ提出した博士論文をもとに加筆・修正を施したものである。研究発表会ならびに審査会で有益なご教示いただいた先生の方々に謝意を表したい。

コウ　シュ（中国江西師範大学国際教育学院）

Re-Examining The Allusion and Theme of Ryūnosuke Akutagawa's *Nidai*

GAO Ziyu

As Ryūnosuke Akutagawa's last historical novel related to ***Konjaku Monogatari shū***, ***Nidai*** describes the story of Sakyamuni and ***Nidai***. Through this study, it is found that the direct allusion of this novel is ***Nidai*** in ***The Collection of Buddhist Biographies*** compiled by Daijyo Tokiwa other than the Buddhist literature. It is found that compared to its allusion, the content of this work is slightly different on the whole except for some modifications he made to make the story more reasonable. For example, the Buddhist doctrine in the allusion has been deleted so that it is more like a modern novel. Furthermore, in the end was a dialogue between Nidai and Sudatta added to enrich the plot of the story. Through the analysis of its ending as well as the mental activity of the characters Nidai and Sudatta, it can be concluded that the theme of the novel ***Nidai*** is to criticize the ugliness concealed in human nature.